

おわりあさひし むけい みんぞく ぶんかざい いちらん  
尾張旭市の無形民俗文化財一覧

区分	番号	名称	指定年月日	保存団体
県指定	23号	尾張旭市の棒の手	昭和33年3月29日	尾張旭市棒の手保存会
市指定	4号	尾張旭市の打ちはやし	昭和58年3月1日	尾張旭市打はやし保存会
市指定	5号	ざい踊り	昭和58年3月1日	尾張旭市ざい踊保存会
市指定	10号	尾張旭市の馬の塔	平成12年4月1日	尾張旭市馬の塔保存会

おわりあさひし むけい みんぞく ぶんかざい かんれんしせき  
尾張旭市の無形民俗文化財 関連史跡マップ



! 行事の予定は、年によって変わることがあります。ホームページなどで確認してください。

# 尾張旭市の むけいみんぞくぶんかざい 無形民俗文化財



## むけいみんぞくぶんかざい 無形民俗文化財って？

「文化財」とは、これまでの私たちの歴史の中で生まれ、現代に守り伝えられてきた貴重な財産です。文化財には、神社やお寺などの建物や、仏像、絵画、お祭り、動植物など、様々なものがふくまれます。そんな文化財の種類のひとつに「無形民俗文化財」があります。無形民俗文化財は、人々の生活の中で生まれたもののうち、衣食住や年中行事などに関わる風俗や習慣、芸能、技術などを言います。無形民俗文化財を守り伝えることによって、その地域の人たちが、どんな生活をしてきたのか、どんなことを大切にしていたかを今に伝えることができます。



県指定  
文化財  
第23号

# おわりあさひし ぼうて 尾張旭市の棒の手

棒の手は、棒や木太刀を使う民俗芸能で、2人から5人が型に従って演技します。五穀豊穣を願って神社やお寺に奉納されます。尾張地方、西三河地方で多く行われてきました。尾張旭市内には5つの流派があり、流派によって違いがありますが、一般的に本来の神事に近い「表」といわれる型と、キレモノ(真剣)などを使ってお客様を楽しませる「花棒」といわれる型があります。



▲胸に当てる  
「カザキリ」

## 無二流(新居地区)

新居村を作った人と伝わっている水野又太郎良春が、奈良の吉野で学び、新居の人々に伝えたと言われています。前に出す足が常にまっすぐであることが特徴で、「イ~ヤ~トオッ」の掛け声が祭りでもひときわ自立ちます。多度神社に奉納します。

## 東軍流(印場地区北部)

伝昌院伝寿という人によって始まり、印場地区北部の斎場、塚本などの苗字の人々を中心伝えられています。この流派は、攻めを主とした演技が多いのが特徴です。渋川神社に奉納します。

## 直師夢想東軍流(印場地区南部)

森理右衛門という人によって始まり、印場地区南部に伝えられました。この流派は、股引(今のズボンのようなもの)が紺色なので、祭りなどで各流派が一緒に演技していく衣装を見分けることができます。渋川神社に奉納します。

## 直心我流(印場地区北部)

比企良伝という人に教わった八木弥一郎博士が伝えたのが始まりと言われています。この流派は早技が特徴です。そのため、演技速度も早く、演技時間や掛け声も短くなっています。渋川神社に奉納します。

## 検藤流(稲葉地区)

毛受勝助の子孫と伝わる毛受周平という人が、農民たちに教えたのが始まりと言われています。この流派では、棒術の基本は「棒刈太刀」とされています。一之御前神社に奉納します。



▲無二流(多度神社)

市指定  
文化財  
第5号

# おどざい踊り



ざい踊りは、市内で古くから行われてきた盆踊りのひとつです。ざい踊りの「ざい」とは、40cmほどの竹筒の片方の端に紅白に染めた紙の房をつけたものです。これを両手に持ち、一つ、二つ…と打ち合わせて、数をとりながら踊ります。かつては、庄内川や矢田川、天白川の周りの地域をはじめとした広い地域で踊られていましたが、現在は、行われている地域は少なくなっています。

ざい踊りは女性が踊る「女踊り」です。衣装は鮮やかな橙色の着物、赤色の帯、水色の襷が基本ですが、夏には、印場地区的「鳳采会」は白地にえんじ色のうちわ柄、三郷地区の「みさと会」は白地に水色のうちわ柄の浴衣になります。



市指定  
文化財  
第4号

# おわりあさひし う 尾張旭市の打ちはやし

打ちはやしは、横笛や太鼓で演奏するお囃子のことと、かつてはどこの地域でもお神楽とともに受け継がれてきました。地域のお祭りでは、演奏しながら神社まで行進し、お神楽を奉納します。また、盆踊りなどにも登場し、提灯山とともに盛りあげます。市内では印場北島地区、庄中地区、井田地区の3つの保存会により伝統が守られています。



▲お祭りでの奉納(直会神社)



▲盆踊りでの提灯山

市指定  
文化財  
第6号

# おわりあさひし うま 尾張旭市の馬の塔

馬の塔は、豊作のお祓や雨乞いなどのために「標具」という飾りで飾られた馬を1頭だけお寺や神社に奉納する行事です。江戸時代の中ごろになると、とても豊作だった年に、いくつかの村が集まって、大きなお寺や神社に馬の塔を奉納する「合宿」も始まりました。合宿は10年に一度くらいしか行われない特別な行事でした。馬を飾る「標具」は、普段の村のお祭りでは、「御幣」が使われますが、合宿では、それぞれの村ごとで異なる特別なものが使われます。現在、市内では印場北部、印場南部、新居、稲葉、三郷地区の保存会が馬の塔の行事と道具の保存、伝承を行っています。



\*馬の塔の標具はお祭りの期間をのぞいて、スカイワードあさひ3階の歴史民俗フロアに展示されています。